
モノクロームの部屋の中、君だけが色をもっていた

朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロームの部屋の中、君だけが色をもっていた

【Nコード】

N6867C

【作者名】

朱

【あらすじ】

中学二年の二学期、葵のクラスに帰国子女の転校生が現れた。甘く切ない異世界物語は彼との出会いで始まった。

キャラクター紹介

<キャラクター紹介>

・久原クハラ葵アオイ

誕生日 6月6日(現在14歳)

身長 157cm

体重 40kg

おとなしめで明るい性格で、

少しだけ天然、鈍感ツ子。

恋愛経験はなし。

桜花中学二年五組、出席番号女子六番。

・安田 ミサキ(ヤスタ ミサキ)

誕生日 12月10日(現在13歳)

身長 158cm

体重 41kg

はっちゃんげ娘。テンションが常に高い。

恋愛経験は山ほどあり。今はフリー。

葵の小学校低学年からの親友。

桜花中学二年五組、出席番号女子三番。

・日向ヒュウガ律リツ <転校生>

誕生日 1月1日（現在13歳）

身長 156cm

体重 38,8kg

美形男子。ものすごいモテモテ。

背は小さめだけど運動神経、学力はトップ。

金持ちらしく（葵談）、行き帰りはベントツで送り迎え。

悩殺笑顔はすごい威力らしい。（葵談）

恋愛経験はナゾ。

桜花中学二年五組、出席番号男子十四番。

・^{イチナ}吉名 ^{シン}深 <執事>

誕生日 2月2日（現在15歳）

身長 172,7cm

体重 47,8kg

律の執事。純日本人だけど生まれつき金髪。

何かとナゾが多い設定にしたのでこれから話の中で

明かせていけるようにがんばります^^

いまのところはこんな感じです。

話が進んで行くにつれこのキャラクターも

増やしていきますのでたまりに見てやってくださいね^^

キャラクター紹介（後書き）

初連載、一人でも多くの人に楽しんでほしいと思います。宜しくお
願いします！

第一話 「帰国子女」

清さ故に、その始まりは

第一話「帰国子女」

『葵っ！アオイってばー!!』

『、、、ほっ?』

『もう、何ボーツとしてんの?』

『ごめん、ごめん』

特に何も考えてなんかなかったけど。

『てゆうかいつもとテンション違うくない?ミサキ』

いつもははっちゃけててギャグ言ったりするキャラなのに。今日はなんだか大人しい気がする。

『そりゃ高くもなるわよ、知らないの?』

『知らないのって、、、何が？』

ミサキは大きなため息をついて、

『帰国子女、転校してくるのよ、あたしたちのクラスに』

『き、きこくしじょおー!？』

、、、帰国子女って、、、英語ペラペラだよね!?女の子だよね、
「子女」だもん、、、す、すごいなあ、、、

『おーいさつさと席付けー鐘鳴ってんだろー!』

ガラリとドアが開いて、先生が少し大きな声で言う。あたしもミサキも慌てて席に座った。

『ったく、もうすぐ三年生なんだから少しくらい成長しろ阿呆ども
ー』

えらい男前なこの先生があたしのクラス担任の篠原美樹先生。一応女だ。ってゆーかそんなのどーでもよくて。

『もう皆知ってると思うけど、転校生いるからー』

そう先生が言った途端教室が一気にざわめく。もちろんあたしも例

外じゃない。

『ホラ日向、入れ』

スラリと細く長い手足。

少し灰色のかかった銀色の髪と、透き通るようなサファイアの瞳。

中学二年の二学期、青春真っ只中の出来事だった。

第二話 「帰国子女2」

みつめる先の、

第二話 「帰国子女2」

『日向^{ヒユウガ} 律^{リツ}です。宜しく』

サファイアが前を見て、
銀色が風に靡^{なび}いた。

クラスが一瞬にしてピンク色の悲鳴で埋まる。『カツコイイ』やらの
『カワイイ』やら、まあ確かにそうなんだけどさ！帰国子女って女
の子だけじゃなかったんだ！

『ねえ葵！！めっちゃめっちゃカッコいくない！？モロタイプなんだけ
どー！』

いきなり肩を掴まれて、振り返ればミサキの真っ赤な顔。

向
』

先生はあたしの目の前にいる日向くん？の背中を押して半場強制的に席に座らせた。ありがとう先生！

、、、つてあれ？隣ですか？

『解んないコトあるだろうから、教えてやれよ』

少し強めに肩にぼん、と手が置かれた。

周りからは嫉妬や恨めしさの痛い視線。左からはもう血出てんじやないか？つてくらいの視線。

、、、今の状況をどう抜け出しましょうか？

桜花学校二年五組六番久原葵、只今ピンチです、、、、！！

第三話 「狼一匹兎一匹」

もうすぐ色づく桃色の頬

第三話 「狼一匹兎一匹」

『、、、、、、、、、、、』
『』

あれから約5分。

朝礼も終わって休み時間の筈なのに今だあたしは席に座ってる。

何故なら左のお方が物凄い動くなオーラ（なんだそれ）を放ってるからです。、、、き、気まずい！！

周りには他のクラスからの日向くん見学者やらうちのクラスの早々と結成した日向くんファンクラブやら、、、、とにかく、日向くん見つめてないで助けてよミサキィ！！

『、、、お前、名前は？』

あーもーどろしたらいいんだろ！いつそのこと思いつきり立ち上がってびっくりさせてやるつか、、、！！！

『、、、おい』

あ、でもそれで逆に怒らせたら後が怖いからなあ、、、

『、、、、、、、、、おいつ！！！！！』

『はっはいいいい！？』

『、、、、、、、、、名前は？』

『は？く、クハラアオイ久原葵です』

『久原か。お前、』

おっ怒られるー！！！

『しっごめんなさい！！！』

『、、、、、、、、、は？』

『あっあの、さっきの、小さいって禁句用語（？）を、、、！！！』

あたしは必死に頭を机に食い込みながら頭を下げる。

『……あれはもういい。』

『……』

『そんなに気にしてないから、頭あげる』

『あ、でも』

『……』

ぐいっと日向くんはあたしの両頬に手を添えて上へ持ち上げた。

『……赤くなってる』

『え、』

おでこに、暖かい何かが、触れた気がした。

『……え？』

その暖かいものが何なのか理解したとき、
あたしのもんじゃないいくつもの高い悲鳴が、空にこだました。

第四話 「最低狼に罰を」(前書き)

前半は律視点です！

第四話 「最低狼に罰を」

色づいた桃色の頬

第四話 「最低狼に罰を」

『ちょ、ちょ、葵あんなにしてんのよー!!--』

『いやいや!怒るんなら普通あたしじゃなくて日向くんでしょ!!--』

『そうだけどなんかムカつくー!!--』

『意味わかんないし!!--』

『いやだったか?』

後ろから聞こえた日向くんの少し低い声。

『あ、あのねえ!嫌とかじゃなくて、』

『じゃあよかったのか？』
『っ！』

日向くんは悠々と自分の席でにやにやと笑いながらこっちを見上げてくる。

きつと今のあたしは林檎のようにまっかつかだろつ。

あーもう！何なんだコイツは！！！

『あーいうことは好きな女の子にしてよね！！』

『惚れてなきやダメなのか？』

『当たり前でしょ！！』

『、、、わかった』

日向くんはキョトンと不思議そうにしながらも頷く。

(可愛いし、、、)

あたしはもしかしたら女の子より可愛いかもしれない日向くんを睨みながら、席に着いて一限目の道具を鞆から出した。

結局その日はそれ以上日向くんとは話さずに家についた。いや、別に話したかったわけじゃないけど！

ちなみにミサキはカツコイイけどよく考えたらタイプじゃないとかで好きにはならなかったらしい。

日向くんはお金持ちなのかもしれない。帰るときに校門に黒いベンツがとまっていて、それに日向くんがのっていた。まあ帰国子女には有りがちな設定だよね、、、、なんて思いながら素通りした。運転席に座ってた金髪の男のひとと眼が合った気がしたけど。

家について、手を洗って。ふと鏡をみたら、あんなに赤くなっていて痛かったおでこが治っていた。

『あれ、治ってる』

ここだったっけ、とその場所に軽く触れる。

だけど日向くんの唇の感覚が蘇って、無性に恥ずかしくなったからすぐ手を離れた。

第五話「灰色夢」(前書き)

更新遅れてすみません><
今日か明日にもう一話!

第五話「灰色夢」

それは酷く鮮やかに、

第五話 「灰色夢」

『、、、律、』

白のような濁ったような空間にあいつの声が響く。

背景なんて何にも無くて異空間のような部屋に俺とあいつの二人だけ。なぜか見覚えのあるシーンで。

床についている自分のものであるう両手に目を向ける。それは手鏡のような小ささで、そして酷く汚れていた。

あいつが俺の名前を呼んだということはおそろしく、、、

これは俺なのか・・・？

『、、、律、』

背中に電流が流れたような感じがした。

『、、、立てる？』

あいつが俺に近ずいてそつと手を伸ばす。俺はその手を何の迷いもなく握った。するとあいつは嬉しそうに微笑んで俺の頭を撫でた。

『……………』

ジリリリリ、と聞き慣れた音が部屋に響いた。

『もう朝か、、、』

あの夢は毎晩見る。

ただどあいつが微笑んだ瞬間必ず目覚ましがなるんだ。続きが気になるわけでもないが、目を覚ますとあいつが居るのではないかと部

屋を見回してしまっ。

あいつがああ夢の中の俺にとってどんな存在なのか。あいつは誰なのか。

どうしてもそれを知りたいと思う俺がいる。

『おっはよう葵ー!!』

『おはようミサキ。相変わらずテンション高いねえ』

少し呆れ気味に言ったんだけど、ミサキはそんなのお構いなしにクラスメイトに次々とあいさつをしていく。おちゃめだなあ。

ちょうどあたしが登校中に乱れた制服を直し終わった直後、ガララ、と後側の扉が開いて、日向くんが入って来た。

少しだけ顔色が悪い気がして声を掛けようと思ったけど、やっぱりおでこのキスを思い出して恥ずかしくなったからやめた。

第六話「ときめくな！」

まるでお伽話

第六話 「ときめくな！」

『おはよう日向くん！...！...！』

『ああ、おはよ』

『日向くんおはよ！...！』

『おはよ、』

周りにハートが散ってそうなくらいハーレム状態の日向くんを特に何もなくてせにめちゃくちや見まくるあたし。

いや、だって、普通乙女なら

キス（おでこ）した後なんて意識しまくるでしょ！？

ただでさえかつこよくて敵がいつぱいいるのに、、、！...！

これじゃあ一生まともに話せない!!!

てゆうかどうして日向くんはあたしにキス(おでこ)なんかしたんだろう?

ちよっとした出来心?それとも単なる悪戯?

-少なくとも本気じゃない

あ、なんか胸が痛い。

肺がおかしい。息が詰まったような、そんな感じ。

苦しい。

なんだろうこの気持ち、

よく解らないけどなんだかすごく切ない、、

『久原、おはよう』

突然真上から降ってきた声に見上げれば
鼻が触れそうなくらいの場所に少し幼さの残った美形。

『、、、お、おはようございます!..!』

第七話「兩色キミ。」

死ぬまでお傍に、

第七話「兩色キミ。」

『お前もしかして、俺の事避けてる?』

・・・教室のど真ん中で（休み時間だけど）
いきなり何言ってるんだ この人は

・・・いや、そりゃ避けてるかもしれないけどさ、元はといえば
貴方のせいでこういう展開になってんですよ!?!日向くん!

年頃の女の子にいきなりキス（おでこ）して・・・!!
動揺しない子はいないよ!

『そ、そんなことにやいよ!』

『バリバリ動揺してんじゃねーか』

『そそそれは、舌が回らなかったとですよ!』

『どこの人だよオマエ』

ははっ、てまたもや天使みたいな惱殺笑顔で日向くんは笑った。同時に周りの女子から黄色い声が聞こえてきた。乙女だなあ。

『キスの事 気にしてんだったら謝るけど』

『え、そ、そんなじゃないよっ!』

いや、実際そうなんだけど。
なんか恥ずかしいから言わないでおこう。

『そうか?・・・じゃあ今度なんか奢るよ』

『い、いーよ、そんな』

『お前が良くても俺が罪悪感感じるからいやなんだよ』

日向くんは少し眉間にしわを寄せてそう言った。
イケメンは何してもかっこいいなあ・・・

『・・・じゃあ、お願いします』

『りょーかい』

あ、また笑った。

ダメだなあ 欲求不満なのかなあだし、
日向君の笑顔にこんなときめくなんて。

やっぱりかっこいいからかなあ、モテモテだし。

うん、確かにものすごいかっこいい。
何気にかわいいし、やさしいし。

仲良くなりたいなあ・・・

恋なんて米粒ほども知らないあたしは、

この感情をどうすることもできなくて

目の前で綺麗に笑っている日向くんに

ただ見とれている事しか出来なかったんだ。

動き始めた、

サファイア色の歯車

第八話「あいさつ」

待ってましたとばかりに、

昇り始めたあたしの何か

第八話「あいさつ」

学校から家へ帰るとき、

ちよつど一本道の真ん中に見覚えのある黒いベンツが止まっていた。
運転席には綺麗な金色が見えて。

（あ、日向くんの付き人？さんだ・・・）

（なんでこんなところにいるんだろ？）

とりあえず顔見知りでもないし

ただ気になるだけだったから、普通に横を通って家に入った。

翌日、玄関を出ると黒いベンツは無くなっていた。
日向くんを送りにいつてるのかな・・・

『・・・・・・・・』

『あーおいっ』

ゲイツ

『つうわあ!?!』

いきなり方を掴まれて、うしろへ引っ張られた。
ちよつと考え事をしてたあたしにとってはカナリ吃驚した・・・!

『あははっびっくりしたでしょー?』

すぐ横には明るい茶色が見えた。

ああ、もう、この子は!

『あつたりまえでしょー!ミサキ!』

『じゅん、じゅん』

ミサキはかわいい笑顔を見せながら、顔の前で掌を合わせて

ふざけたように無邪気に笑った。

憎めないなあ。

『ていうか何でこっちの道にいるの？遠回りになっちゃっうでしょ？』

あたしとミサキは家が反対方向で、一緒に帰ったりできない。
本当は行きも帰りも一緒に行きたいんだけど・・・。

『今日はいつもより早めに起きたし、葵と行くつもりで』

・・・え・・・？

まさか、

『・・・わざわざ来てくれたの？』

『うん』

なっ、なんて友達思いな子なのっ！！

うわ、どうしょ、めっちゃめっちゃ嬉しい・・・！

『ミツミサキ・・・！』

『いい友達持ちましたねエ、久原さん』

そのふざけた敬語がまたおもしろくて、嬉しくて

『はいつ本当に!?!』

『・・・あははっ! 葵涙目! ホント涙もろいんだからっ』

ばん、とけっこ強めに背中を叩かれた。

ほんとにいい友達もったな! 自分!

『おっはよーう!』

『おはよー』

教室のトビラをガラリと開けて、
ミサキに続いてあいさつをした。

『おはよう、葵ちゃん、ミサキちゃん』

『二人とも遅いよー』

『あれ、今日は二人できたの?』

クラスの女の子達が反応してくれてた。

男の子は気付いてるっぽいけどあいさつを返してくれない。
そういう年頃なのかもしれないけど、やっぱりちょっと物足りない
なあ

『久原、おはよ』

少しだけハスキーな声に振り向けば、やっぱり美形がこっちを見て
た。

『ひゅ、日向くん！おはようっ』

慌ててあいさつを返したら、少しだけ笑われた。
胸らへんが少しだけきゅう、ってなって、顔が熱くなった気がする。
何だろう、これ？

『『おっおはよう、日向くん！』』

『『『きゃあ、律くんー！おはようー！』』』

周りの女の子達も次々に日向くんにあいさつしていく。
みんな頬がピンク色になっていて、眼がキラキラしてる。
恋ってそんなにすごいものなのかなあ・・・？

っていつか今、誰か日向くんのこと名前で呼んでたよね。
話した事もないのに名前で呼ぶのって失礼じゃないかなあ？

『あなたの彼氏、やっぱりかっこいいわねエ・・・ありやモテない方がおかしいわ』

・・・え、か、彼氏・・・？

『ひゅ、日向くんって彼女いるのー!?!?』

・・・あ・・・しまった・・・!つ、つ
い・・・!

ただ日向くんの答えだけが気になってしょうがなくて。

日向くんの口が開いた瞬間、既にあたしの思考回路は止まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867c/>

モノクロームの部屋の中、君だけが色をもっていた

2010年10月28日07時51分発行